

実践団体情報

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日（2018 年度のチャレンジプラン）
実践団体名	高知県立大方高等学校
代表者名	大西雅人
プラン全体のタイトル	高校生が作る地区防災計画
電話番号	（０８８０）４３－１０７９
メールアドレス	ogata-h@kochinet.ed.jp
実践団体の説明	本校は高知県の黒潮町にある唯一の高等学校である。南海トラフ地震における甚大な被害が予想されるなかで、防災教育に力を入れている。学校生活のなかで生徒が地域の方と交流する機会が多くあり、近隣の保育園や小学校中学校との連携も推進している。
所属メンバー	（代表）校長：大西雅人 （担当）教諭：浦田友香 近森美保
活動地域	高知県幡多郡黒潮町
活動開始時期・結成時期	2018 年
過去の活動履歴・受賞歴	（2016 年）「世界津波の日」高校生津波サミット議長校 （2017 年）高知県実践的防災教育推進事業実践校

プラン全体の概要	本校は災害時に地域の避難所となることになっている。これまで行ってきた避難訓練中心の防災教育に加え、被災後の避難所生活を視野に入れた防災教育に取り組んだ。被災時や被災後、自分たちの周りで起こることを想像し、考え、備えるといった活動を重視している。そのような活動を通して本校生徒の防災力と防災意識を高めることを最も重要な目的としている。
----------	--

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4月	・教員防災教育プロジェクトチーム結成 ・「地域学」の指導計画	・オリジナル HUG について学ぶ	・学校設定科目「地域学」のなかで、「大方高校オリジナル HUG」(以下オリジナル HUG)作成を始める。
5月	・生徒防災委員会結成	・施設調査のための準備	・オリジナル HUG 作成経験のある地域の方からの授業 ・学校の施設調査
6月	・防災講演会の企画		・「逃げトレ」のアプリを用いた避難訓練、地区の避難タワー調査
7月	・夏季休業中のイベント(HUG の実践)の企画	・防災講演会の生徒役割分担・準備	・防災講演会
8月		・活動発表のスライド準備 ・生徒の発表練習	・AMDA 中学高校生会との交流会 ・防災学習実践研究会の方々とオリジナル HUG 実践
9月		・宮城県多賀城高校への質問内容の整理	・宮城県多賀城高校との交流会
10月	・防災教育チャレンジプラン中間報告会	・被災地の高校生への質問内容をまとめる。	
11月		・特別支援学校への聞き取り内容をまとめる。	・避難所運営訓練 ・炊き出し訓練 ・中村特別支援学校からの聞き取り ・宮城県多賀城高校とのテレビ会議による聞き取り
12月		・地区の方への活動発表の準備	・地区防災会議にて提案
1月			・オリジナル HUG ルールブック

			ク作成
2月	・チャレンジプラン最終報告会		
3月			

プラン全体の反省点・課題・感想	・地域の方と協働して、防災計画について考えていくことを目指したが、一部の地域の方との連携にとどまった。今後は高校生が積極的に呼びかけ、交流を広げていきたい。 ・オリジナル HUG 実践をして得られた学びを避難所運営マニュアルに反映させることには、簡単なことではないと分かった。これから、地域の方と更に連携を深め、役場や県などの協力もいただきながら、着実に生徒の学びを生かしていきたい。 ・オリジナル HUG 作成に取り組んだ「地域学」受講者や、生徒防災委員の生徒を中心に、防災意識の向上が見られた。また、防災の取組を通して生徒が興味関心を広げ、自信をつけているといった変容を感じることができ、本校にとっては大きな成果ととらえている。 ・今回はオリジナル HUG 作成を中心として取り組み、その作成と実践を通して生徒の成長を促すという計画であった。しかし、オリジナル HUG は様々な方に興味を持っていただき、結果として生徒は当初の予定以上に外部の方と関わる機会をいただいた。オリジナル HUG 作成をきっかけとした人との関わりのなかで生徒が成長した部分が大きいと考えている。
今後の活動予定	・高校生による出前授業などを通して、近隣の保育園・小中学校との連携を進める。 ・「大方高校避難所運営マニュアル」の改善を実現するため、改定案をまとめて町や県に提案する。

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日 (2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	①	
タイトル	大方高校オリジナル HUG 作成	
実践担当者のお名前	浦田友香	
実践にかかった金額	ほぼ 0 円	
実践の準備にかかった時間	数日	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 4 月～西暦 2018 年 8 月	
実践の所要時間	4 0 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	8 人	
防災教育の対象者の属性	高校生	
防災教育の対象者の人数	約 1 0 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	高知県立大方高等学校	
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	・地域に人脈を持っている方 ・「イラストレーター」のソフト	
達成目標	・被災後の生活のことについて考える意義を知る。 ・今後被災地になり得る地域に住む高校生として、できることを考える。 ・地域の現状を知る。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	①「HUG」について学ぶ ・市販の HUG を実践する ・オリジナル HUG 作成経験のある地域住民の方からの授業 ②災害との向き合い方を学ぶ ・諏訪清二先生による防災講演会 ・宮城県多賀城高校との交流会・テレビ会議 (被災された方のお話を聞き、災害とどのように向き合うか、考える。)	

	③オリジナル HUG のカードづくり ・地区長に協力していただき、実際の住民データで HUG の人物カードを作成 ・防災講演会や被災地の高校生との交流から学んだことを活かし、HUG のイベントカードを作成 ④校舎図・学校敷地図・校舎説明書の作成 ・人物カードを避難所で一人が必要なスペースとする縮尺の校舎図を作成。 ・駐車場や喫煙スペースなどを決めるため敷地図を用意。 ・各教室の説明書を作成。 (机や椅子、床の状態、備品などについて記入) ⑤その他のルール設定 ・夏と冬の二つのバージョンで HUG を行えるよう、それぞれの気候条件を設定し、夏のイベントカードと冬のイベントカードを作成した。 ・HUG 実践での学びを記録するため、イベントカードにどのように対応したかを記録するシートを作成した。 ・あらゆる想定でゲームを行えるよう、イベントカードを「発災直後」「発災後一週間経過」「発災後三週間経過」などに分けて作成した。	
得られた成果	・生徒が「HUG」について学ぶことができた。 ・市販の HUG ではなくオリジナル HUG を作成する意義について共有することができた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・被災したことのない高校生にとって未経験であることをどれだけ想像させるかということは課題であった。被災経験のある方や、同世代で被災した高校生との交流を重要視した。 ・大方高校に避難してくる想定の方の地区の地区長の方が協力してくださった。地域の方の防災に対する意識が一定以上あったからこそ住民の情報を頂	



	くことができたのだと思う。また、地区の方と学校とをつないでくれる方に大変お世話になった。もし教員だけで連携を進めるとなると、もっと苦労があったと思われる。
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	黒潮町新町地区地区長
関係者の説明	大方高校に避難してくる想定の地区の地区長の方
関係者の名前・団体名	杉山高志氏
関係者の説明	京都大学大学院情報学研究科博士後期課程
関係者の名前・団体名	矢守克也氏
関係者の説明	京都大学教授
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	地域の方々
伝えたい内容	オリジナル HUG を作成する過程で、高齢化と言われる地域の現状を改めて実感しました。そしてそのような社会で高校生の担う役割を、生徒は感じています。是非高校生を頼ってほしいと思います。

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日 (2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	②	
タイトル	大方高校オリジナル HUG 実践 ～学校外の方々との実践～	
実践担当者のお名前	浦田友香、近森美保	
実践にかかった金額	3000 円未満	
実践の準備にかかった時間	数日	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 8 月	
実践の所要時間	6 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	10 人	
防災教育の対象者の属性	中学生・高校生・大学生・教職員・社会人/一般・防災関係者	
防災教育の対象者の人数	約 50 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	高知県立大方高等学校	
達成目標	・自分たちが作ったオリジナル HUG を外部の方と実践し、客観的な意見を聞く。 ・オリジナル HUG や、大方高校の避難所運営の課題を知る。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	①「大方高校オリジナル HUG」の準備 ・人物カード、イベントカード、校舎見取り図を用意 ②保健主事会にて「大方高校オリジナル HUG」実践 ③防災教育実践研究会の方々と「大方高校オリジナル HUG」実践 ・「大方高校オリジナル HUG」実践 ・防災教育実践研究会の方からの助言をいただく ・実践を振り返り、オリジナル HUG の課題を学ぶ ④AMDA 中学高校生会・佐賀中学校・大方中学校との交流会 ・各自の取組発表、意見交換	

	・「大方高校オリジナル HUG」実践	
得られた成果	・自分たちの手で作成したオリジナル HUG を、外部の方と一緒に実践することで、客観的な視点を得ることができた。 ・防災教育の専門家の方の意見をいただくことでオリジナル HUG の意義を確認し、改善点を知ることができた。 ・同じように防災に取り組む黒潮町の中学生や、県外で活躍する中高生と、お互いの取組について意見を交換することによって、良い刺激を受けることができた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・この3回の実践は夏休みに行った。オリジナル HUG のルール説明や全体の進行などを、オリジナル HUG 作成を行った「地域学」(学校設定科目)を受講している生徒や生徒防災委員会の生徒に行わせた。そうすることによって、自分たちが主導で取り組んでいるという自覚を生徒に持たせることができたと考えている。 ・生徒は、HUG を初めて体験する人や、大方高校の校舎に詳しくない人に、ルールや考え方などを説明するのに苦労していた。	
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について		
関係者の名前・団体名	諏訪清二氏・防災学習実践研究会	
関係者の説明	チャレンジプランの実行委員でもある諏訪清二氏をはじめとする防災学習実践研究会の方々に、オリジナル HUG についてアドバイスを頂いた。	
関係者の名前・団体名	AMDA 中学高校生会、大方中学校、佐賀中学校	
関係者の説明	国内外でボランティアを行っている AMDA 中学高校生会と、日ごろから防災活動に力を入れている大方中学校、佐賀中学校の皆さんとオリジナル HUG 体験を行った。	

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日 (2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	③	
タイトル	避難所運営訓練 (オリジナル HUG を用いた地域と高校生の実践)	
実践担当者のお名前	浦田友香、近森美保	
実践にかかった金額	3000 円未満	
実践の準備にかかった時間	数日	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 11 月 10 日 9 時 00 分～西暦 2018 年 11 月 10 日 12 時 00 分	
実践の所要時間	3 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	30 人	
防災教育の対象者の属性	高校生・教職員・地域住民・社会人/一般・高齢者・防災関係者	
防災教育の対象者の人数	約 100 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	高知県立大方高等学校体育館	
達成目標	・「大方高校オリジナル HUG」を地域住民の方に知ってもらう。 ・防災委員や「地域学」受講者以外の生徒が「大方高校オリジナル HUG」について知る。 ・被災後の避難所運営について地域の方と高校生で考える。 ・「大方高校オリジナル HUG」の改善点を知る。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに

実践内容・方法	①「大方高校オリジナル HUG」の準備 ・人物カード、イベントカード、校舎見取り図を用意する。 ②「実行イベントカード」の作成 ・イベントカードのなかに、図上ではなく実際に行動するカードを入れた。 (例えばそのカードに「掲示板を作ってください」と書かれていれば実際に作る。「車いすが必要」と書かれていれば実際に探して持ってくる。など) ③地域の方、役場の方にお知らせする。 ④「オリジナル HUG」を実践する。 ・12のグループに分け、それぞれに1年生から3年生と地域の方と教員が入るようにする。 ・教員は読み手をやる。 ・イベントカードが出てくるたびに、その対応方法を記入していく。 ・個人で振り返りシートを書く。	
得られた成果	・「大方高校オリジナル HUG」の取組について、地域住民の方や役場の方に知ってもらえた。 ・地域の方に「高校生が真剣に考えてくれていて頼もしい」「一緒に頑張りましょう」などの言葉をいただき、高校生が自信を得ることができた。 ・地域の方と高校生が協力して避難所運営について考えることで、交流を深めることができた。 ・「大方高校オリジナル HUG」の取組を一部の生徒だけでなく、全校生徒と教職員に広げることができた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・地域の方に参加していただくために平日ではなく土曜日に行った。 ・地区長さんに協力して呼びかけていただいたが、一部の住民の方にしか参加していただくことができなかった。高校生が直接呼びかけると更に参加者を増やすことができるのではないかとされる。	



★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	黒潮町役場
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	地域の方々
伝えたい内容	本校はこれからも防災に対する取組を、地域の方々と共に進めていきたいと考えています。黒潮町にある唯一の高校の生徒として地域に貢献してまいりますので、日ごろからの交流を今後もしようとお願ひいたします。

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日(2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	④	
タイトル	津波避難訓練&炊き出し訓練 ～浜辺から避難し、自分たちで食料確保！～	
実践担当者のお名前	浦田友香、近森美保	
実践にかかった金額	3 万円未満	
実践の準備にかかった時間	数日	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 1 月 13 日 10 時～16 時	
実践の所要時間	6 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	30 人	
防災教育の対象者の属性	高校生	
防災教育の対象者の人数	約 80 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	入野海岸・高知県立大方高等学校中庭	
達成目標	・ 浜辺にいる時に大地震が発生した場合の学校までの避難経路を確認し、津波到達時間までに逃げるイメージを得ること。 ・ 限られた条件のなかでより良い行動を考える体験をする。 ・ 生徒同士で協力して取り組むことを体験する。	
どの力を身につけようとしていましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	①浜辺から学校までの避難訓練 ・ 浜辺にいる状態で地震速報を流し、各自で学校まで避難する。 ・ 学校に到着するまでの時間を計測し、津波到達時間と見比べる。 ②炊き出し訓練 ・ 生徒は各自家庭にある食材を持ち寄る。 ・ グループに分かれ、各自持ち寄った食材と学校にある道具(バーベキューセット、包丁、ガスコンロ、ラップ、水、紙皿、紙コップ)を用いて	

	調理する。 ・道具の返却まで生徒たちが行う。 ③竹筒炊飯 ・竹筒を用いて炊飯し、試食する。 ④振り返りシートへの記入 ・炊き出し訓練をやって気づいたことや反省について振り返り、記述する。	
得られた成果	・浜辺からの避難訓練では、生徒それぞれが、自分が走って何分かかかるのかということを知る良い機会となった。 ・学校行事を浜で行うことも多いので、入野海岸は生徒にとっては身近な場所である。海岸にいるときにした場合の経路の確認ができ、良い機会となった。 ・炊き出し訓練では、教員のいない生徒グループのなかで協力し合い、場に応じた対応をする訓練ができた。 ・これまで自分たちの手で火をおこすなどの経験がなかった生徒たちがいた。自分たちで工夫をして体験したことによって、被災時も知恵を出し合って協力することで何かができるという自信を得ることができたと思われる。 ・生徒の振り返りシートには、「道具の貸し出しが混雑した」「ごみが驚くほど出た」「リーダーがいないと作業が進まない」など、実際にやってみて初めて得られる発見があったようであった。また、「実際はもっと混乱するだろう」「実際はもっと食料がなくて困るはず」など、実際に被災した場合を想像し、具体的に考えることができた。 ・この訓練を通して、ガスコンロの有用性を確認し、学校の備蓄品としてガスコンロを追加するなど、避難所として見直すこともできた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	かなり
課題・苦労・工夫	・これまで、避難訓練や避難所についての学習など、防災学習は教員主導のものになりがちであった。今回は生徒の主体性に任せることを意識	



	し、防災のための取組ではあるが仲間と楽しむという要素も大切にしました。 ・もっと生徒に考えさせる活動にするには更に工夫が必要である。
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	地域の方々
伝えたい内容	炊き出し訓練を通じて、非常時ほど、人と人との関係が重要であると感じました。いざというときに協力できる信頼関係を日ごろから築いていきたいと思っています。

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日 (2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	⑤	
タイトル	地区防災会議で高校生からの提案	
実践担当者のお名前	浦田友香、大島励二	
実践にかかった金額	ほぼ 0 円	
実践の準備にかかった時間	数時間	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 1 2 月 1 6 日	
実践の所要時間	1 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	3 人	
防災教育の対象者の属性	高校生・地域住民・高齢者	
防災教育の対象者の人数	約 10 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	町地区集会所	
達成目標	・新町地区の住民の方に避難タワーへの避難だけでなく大方高校への避難の可能性を検討してもらう契機とする。 ・地域の方に自分たちの学習の成果を発表することによって、生徒が達成感を味わうことができる。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	①地区の方の避難計画について知る。 ・大方高校に避難してくる想定 of 地区の住民の方が災害時どのような避難行動を計画しているかということを知る。 ②地区の避難タワーの調査 ・地区の避難タワーの備蓄品について、どのようなものがどれくらいあるのか、調査する。 ・地区のタワーの過ごしやすさや広さについて調べる。 ③地区の避難タワーから大方高校まで「逃げトレ」を用いて避難訓練をす	

	る。 ・ゆっくり歩いた場合、ねこぐるまを押しながら逃げた場合、車いすを押しながら逃げた場合などのグループに分かれ、「逃げトレ」のアプリを用いて避難訓練をする。 ・「逃げトレ」の結果、どの場合でも津波到達時間までに大方高校まで避難することができた。 ④地区の防災会議で提案 ・条件によっては避難タワーだけでなく大方高校への避難も可能であることを報告、提案。 ・地区の方からご意見をいただく。	
得られた成果	・大方高校の取組について地域の方に知ってもらうことができた。 ・自分たちの取組を地域の方に発表することで、生徒が達成感を得ることができた。 ・地区の方が、被災時の避難についてどのように考え、どのようなことが不安であるのかということを知ることができた。 ・高校生と地区の方が被災時の避難行動について直接話し合うことによって交流が深まった。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・想定以上の津波が来た場合や、長時間救助が来ない可能性を考えると、避難タワーへの避難にも不安が残る。その点を考慮し、条件によっては、更に高台が目指せて備蓄も豊富な大方高校への避難を選択肢にいれてはどうかということを提案した。住民の方からは、選択肢が増えると混乱するのではないかという不安の声が聞かれた。	
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について		
関係者の名前・団体名	新町地区の住民の方々	
関係者の名前・団体名	杉山高志氏	
関係者の説明	京都大学大学院情報学研究科博士後期課程	
★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ		

実践したプランの内容と成果

記入日	西暦 2019 年 1 月 7 日 (2018 年度のチャレンジプラン)	
実践団体名	高知県立大方高等学校	
実践番号	⑥	
タイトル	「大方高校オリジナル HUG」ルールブックづくり	
実践担当者のお名前	浦田友香	
実践にかかった金額	ほぼ 0 円	
実践の準備にかかった時間	数時間	
実践活動を実施した日時	西暦 2018 年 1 2 月～	
実践の所要時間	5 時間	
実践の運営側で動いた人の人数	3 人	
防災教育の対象者の属性	高校生	
防災教育の対象者の人数	約 10 人	
実践を行った都道府県と市区町村	高知県幡多郡黒潮町	
実践を行った具体的な場所	高知県立大方高校	
達成目標	・初めて人でもオリジナル HUG ができるようにルールを整え、ゲームの導入をスムーズにすること。 ・ルールブックづくりを通して、生徒がより具体的に避難所のルールをイメージすることができ、避難所としての課題などについて考えることができた。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
実践内容・方法	①これまでのオリジナル HUG 実践を振り返る ・オリジナル HUG 実践のなかで、初めて体験する人には分かりにくかったところや細かいルールについて検討する。 ②オリジナル HUG ルールブックを作成する ・初めて HUG を体験する人や大方高校に詳しくない人でもオリジナル HUG 実践ができるように、ルールブックにまとめる。	

得られた成果	・ルールブックに従って誰でもオリジナル HUG を体験することができるようになった。 ・近隣の小学生や中学生にオリジナル HUG を貸し出し、体験してもらうことができるようになった。 ・ルールブック作成を通して、「大方高校オリジナル HUG」の改善点などについて検討することができた。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	かなり
課題・苦労・工夫	・初めて HUG を体験する人や、小学生にもわかるような説明を考えることに生徒は苦労していた。 ・生徒は、どのような様式が分かりやすいのか、どの順番で説明すればよいか、ということに苦心していた。教員にとっても客観的な正解が分からないため、指導に苦労した。 ・市販の HUG にはないルールがあるので、細かいルール設定に苦労した。	
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について		
関係者の名前・団体名	杉山高志氏	
関係者の説明	京都大学大学院情報学研究科博士後期課程	